

# 赤ん坊のもつ力

松本侑壬子・ジャーナリスト

題名は、南アフリカのスラム街でたむろする「不良」「チンピラ」を意味するスラング。主人公の少年17歳は、本名でなく、そう呼ばれてきた。本作は、赤ん坊誘拐事件を通してツオツィが自我に目覚め、ただの不良からデヴィッドという名の人格ある人間に成長していく姿を感動的に描いている。

南アフリカ・ヨハネスブルグのスラム街。10年余り前に悪名高いアパルトヘイト（人種隔離政策）が廃止された後、今は「世界一の格差社会」というさらに厳しい現実にあえいでいる。街には無数の孤児たちが積み重ねた土管の中に住み着き、物乞いやかっぱらいをして辛うじて生き延びている。ツオツィもそうして大きくなった。

今は、仲間と徒党を組んでのし歩き、喧嘩、窃盗、銃で脅してカージャック。車椅子の物乞いを追い詰めていじめたり、怒りと憎しみに突き動かされて衝動的にただ生きる毎日。人種差別は表向きにはなくなったが、今度は黒人同士の貧富の差の著しさに驚く。豪邸に住み高級車を乗り回す一握りの黒人がいる一方、スラム街には電気も水道もないぼろぼろの小屋にエイズの恐怖にさらされながら暮らす人々もいる。犯罪も暴力もあってはならないことだ。でも、それで成り立っているような生活はどこからくるのか、アパルトヘイト廃止後の南アの現実を内側から噛み締めるように描く。

事件は、ある豪邸の門の前で起きた。ツオツィが、外出から車で戻ってきたこの家の夫人を脅してカージャック。夫人が狂ったように車を追うには理由があった。後部座席には生まれて間もない赤ん坊が眠っていたのだ。

赤ん坊をいったん自宅の小さな部屋に連れ帰ったツオツィは、初めて赤ん坊というものをまじまじと見る。恐れ気もなくウンチをし、お腹が空けば相手構わず声を張り上げて泣き叫ぶ小さな命。ともあれ、オムツの代わりに新聞紙でお尻を包み、缶詰スキムミルクを赤ん坊の口に流し込む（！）。無造作に紙のショッピングバッグに入れた赤ん坊を持ち歩くのは身代金要求のためか、母親代わりにミルクをくれる人を捜してのことか…。

無法者の心に不思議な感情が生まれたのは、赤ん坊を背負った若い未亡人の家に押し入ったときだった。ござっぱりと片付いた部屋で、彼女は自分の子にも他人の子にも豊かな胸からおっぱいを飲ませ、「あなたは母親にはなれないのよ」と赤ん坊をお屋敷の母親に返すように諭す。銃に怯えながらも他人の赤ん坊を気遣うやさしさと強さ。命を守り命を育てる…。暴力にしか頼ることを知らないすさんだ若者が初めて知る母親の愛の姿だった。ツオツィは赤ん坊の名を聞かれ、とっさに自分の本名デヴィッドと答える。自分の名前を言うことで、人それぞれに大切な名前も命もあり、怒りや憎しみでなく守り愛し合う関係もあることに思い至る。

そして、迎えるクライマックス。その豪邸の前で、憔悴しきった両親の目の前で、殺気立った警官隊に取り巻かれたツオツィと赤ん坊は…。

初めて映画化されたアパルトヘイト後の南アの現実は想像以上に厳しい。だが絶望の中で命の力、命を守る力はたくましい。胸の熱くなるラストシーンに明日への希望を見る思いだ。



英・南ア合作映画（94分）／ギャヴィン・フッド監督

## 『ツオツィ』

4月14日（土）より、TOHOシネマズ六本木ヒルズ他全国ロードショー

